

世田谷村日記

石山修武

六月十七日

十時大学、大学院レクチャー準備。一九九五年サティアン、ドラキュラの家、星の子愛児園。二〇〇五年木場倉庫。設計の中の小さな歴史。昨日、混野君に会っても、一昨日、坂田明に会っても同様な事を感じたのだが、ここ十年の日本そして身の廻り、及び私自身の激変振りは大きい。白い廃墟に生きている風あり。

十二時十五分了。ダムダン竹居正武氏といささかの連絡。十六時迄諸々の雑用。その後打合わせ。二〇時迄。細かな打合わせ程エネルギーを要する。二〇時二〇分近江屋で若松氏と会食。二十一時半迄。二十二時過新宿、京王線のシートに座っている。明日は午後、研究室で色々と用事の予定だな。二十二時半、世田谷村に戻る。

六月十八日

午前中世田谷村で仕事。十三時前大学。鎌田遵君来室。磯崎宙山本匠一郎両君来室。十三時三〇分過予定通りアレクサンドロ・ソクーロフの「精神の声」上映会。四〇名位の人が集まった。私も始まりの一時間位だけ付き合おうと決めて、観始めたが、これが実に眼が離せない、不思議な力を持つ映画で、とうとう全部観てしまった。十八時三〇分頃修了。この映画の戦争の現場であるタジキスタン、アフガニスタンの国境地帯に、それでも行く意志のある人間だけ残って、連絡先を記名してくれの結末で、結局十四名の人が残った。内、女性三名。ソクーロフの映画に登場する

兵士たちと同じ年位の学生もいて、彼等がああ五時間の体験で何を感じて、何に興味を持ったのか、聞いてみたい気がする。彼らが現実にあの映画の兵士達のように、荒涼たる原野で粗い石を積み続ける事が起きたら、これは現代の日本では奇跡に近い様な事であろう。

夕食は高田馬場、文流で。磯崎、山本両氏と。二十三時頃世田谷村に戻る。

六月十九日 日曜日

今日は休む。昼過、ニューヨークの次女友美より電話あり、元氣そうだった。あいつは強い。何かをやり遂げるかも知れない。親バカだね。

六月二十日

十時半世田谷村を発つ。十一時過大学。諸雑事。十四時過シャープ社来室。リアスアーク美術館、他のプロジェクト相談。雑打合わせ幾つか。近江屋でソバ会食で若松氏と相談。二十二時過世田谷村に戻る。

今日も何とか時間をひねり出して、HPのカバーコラムを新しく一本書けた。コラム風に書く度に、山本夏彦翁の厳しい笑いを思い起こす。しかし、やってみよう。一日一本のコラムを書くのを責務にしたい。長い論を書くのが律義な願望だが、三枚弱のコラムを書き続けるのも、それ以上に大変なのだと敢えて言う。近江屋で会った友人から資本の増資よりも、減資の方が投資家に喜ばれるという現実がある事も勉強した。資本のゲームは誠に複雑極まる。